

倫理, 政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和3年度(第1回)大学入学共通テスト(以下「共通テスト」という。)の「倫理, 政治・経済」(以下「倫政」という。)の問題は, 大問7問で構成され, 「倫理」分野から4問, 「政治・経済」分野から3問が出題された。設問は, 「倫理」分野から16問, 「政治・経済」分野から16問で, 設問はすべて単独科目からの引用で, 配点は50点ずつであった。

ここでは, 本年度の問題について以下の視点から分析し, 「倫理」と「政治・経済」それぞれの問題作成方針に基づいたものとなっているかどうかについて評価したい。

- (1) 問題作成方針を踏まえて, 知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め, バランスのとれた出題となっているか。
- (2) 高等学校学習指導要領(以下「学習指導要領」という。)の範囲内から出題されており, 特定の分野・領域に極端に偏っていないか。
- (3) 出題される資料等が, 特定の教科書に偏っていないか。
- (4) 高等学校における学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており, その場面設定が, 教科・科目の本質に照らし必然性のある形で出題されているか。
- (5) 試験問題の構成(設問数, 配点, 設問形式等)は適切であるか。
- (6) 文章表現・用語は適切であるか。
- (7) 問題の難易度は適正であるか。
- (8) 得点のちらばりは適正であるか。

2 内容・範囲

第1問 「恥」について(源流思想)

「恥」にまつわる先哲の様々な思想を述べており, 受験者へのメッセージ性がある場面設定である。高校生の会話という日常の場面から共同体や社会への貢献をめぐる考え方や, 自分内にも外にも原因を持ち得る「恥」の捉え方の意味を多面的・多角的に考察するという学習過程を重視している。全体としては, バランスの取れた標準的な難易度の大きな大問である。

問1 共同体や社会をめぐる思想について問われている。①のペテロによる教団の形成が基本的な知識として解答出来る。④は, ムスリムの共同体についての細かい知識が問われており, 全体として, やや難易度が高い設問である。

問2 「恥」と関連付け, パウロの言葉から「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」がユダヤ人だけでなく異邦人にももたらされるという福音の正確な理解が求められている。律法主義と福音との違いも問われ, 平易だが信仰の意味を問う良問である。

問3 自己の生活における心の平安を求めるエピクロス派とストア派の思想について理解を問うやや難易度の高い設問である。

問4 恥じ入ることは「慚愧に堪えない」という意味について, 上座部仏教の資料や選択肢を読み進めることで恥に関わる概念の理解につながる設問である。標準的な難易度ではあるが日常生活の場面と先哲の思想を関連させ自分自身に置き換えて考察させる良問である。

第2問 「時間の捉え方と人生観・世界観」について(日本思想)

日本思想の分野としては初めて図版を登場させたり、ギリシア思想の引用を用いたりするなど意欲的な取組が見られた。一方で、絵画資料をどのように活用していくのか、その活用方法について検討の余地があるだろう。古代から現代までバランス良く出題されており、大問全体としては標準的な難易度である。

問1 日本の神々についての理解をもとに、論理的思考に基づき資料を読み取らせる設問である。資料にヘシオドスの『神統記』を用いており、日本思想と源流思想の融合を試みた意欲的な設問である。

問2 日本思想の問題で初めて絵画資料を用い、絵画資料をもとにノートに書かれた記述や知識を活用して考えさせる良問であり、今後もこのような工夫を続けてほしい。

問3 江戸時代の儒者についての総合的な理解を問う設問で、難易度も標準的なものである。

問4 小林秀雄、丸山真男、吉本隆明は、それぞれ教科書本文での扱いも少なく、その考え方に踏み込んで学ぶ機会が余りない受験者にとっては難しい設問である。

第3問 良心について（西洋近現代思想）

眼前の敵を撃つ瞬間の兵士のためらいの話から、良心をめぐる西洋近現代思想の流れをたどり、最後に日々の生活の中で自分なりの答えを探し求めることについて問いかけている。設問ごとに資料や会話文などがついているものが多く、読解にやや時間が掛かるかもしれないが、全体的に大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）と比べて大きな変化は見られなかった。

問1 デカルトの高邁の精神の内容についての理解を問う難しい設問。リード文でデカルトについて述べた部分が「情念を主体的に制御する」高邁の精神の内容と重なり、正答を導く際の参考になる。

問2 資料『エミール』についての設問。選択肢がルソーの思想を身近な事例に置き換えたものとなっており、思考させ、思想への理解を深めさせることができる。高校の授業で積極的に取り上げることができる素材である。

問3 キルケゴールの実存の三段階についての基本的な理解を問う標準的な難易度の設問。

問4 リード文に関連した良心についての会話文の読解問題。設問に用意された会話文としては長めであり、先生Tの発言内容も示唆に富んだものであるが、読み進めていくと、最後のTの発言から正答を導くことができるため、結果として平易な設問となった。

第4問 歴史の多様性と捉え方について（現代の諸課題と心理）

「歴史」に関する高校生同士の会話文に始まり、それを踏まえさせる形で同じ生徒同士の追加の会話文を読んで解答する設問が見られた。今後注目されていくであろう思想家も数多く取り上げられ、初見の受験者には難解な印象を与えるが、正確に文脈を読解すれば正答を導ける。思想内容をおさえた上で、的確な資料の読み取りを求める設問が多かった。

問1 フロイトの心の構造の基本的な理解があればよく、文章の読み取りも平易な内容であるため、容易に正解できる。

問2 冒頭の会話文を理解した上で、追加の会話文を読む設問。空欄aは、従来の趣意合致の設問と同じ要領で解答できる。bは「自然の生存権」の理解が求められる。平易ではあるが、倫理の知識のみを問うのでも、読み取りのみで得点できるでも訳でもなく、知識の理解と論理的思考力の両方を問う工夫が見られた。

問3(1) 高校生の会話文の中に下線部がある形式は新しいが、内容的にはマルクスの思想の知識だけで正解できるので、問い方の工夫がされるとなおよい。

問3(2) レポート中の空欄に、設問全体の趣旨に沿うように文章を補充する問い。粘り強く丁

寧に判断すれば正答できる。ベンヤミンは教科書でも取り扱いは少ないが，設問を解くことで，思想の学びがかなう点で良問である。

第5問 民主主義の基本原則と日本国憲法

民主主義の基本原則と日本国憲法をテーマにした政治分野の問題である。法律や政治に関する講義に参加するという形式のため，スムーズに設問に取り組むことができる問題であった。難易度は標準的である。

問1 諸資料から公法と私法と自治の在り方との関係についての理解を問う，やや難易度の高い設問である。

問2 消費者を保護する観点から，契約の意義についての基本的な理解を問う標準的な難易度の設問である。

問3 義務教育の無償について，諸資料から読み解く標準的な難易度の設問である。

問4 時事的な候補者男女均等法に関する基本的な理解を問う平易な設問である。

問5 政治の自由化と包括性の概念について資料を活用しながら思考力・判断力・表現力等を求める応用的な設問である。

問6 二院制をとる国の議会の運営についての理解を問う，やや細かな設問である。

第6問 現代の経済

現代の経済をテーマにした経済分野の問題である。雇用や賃金について，国家や財政の状況，銀行制度，国際経済の変化の関係から捉える出題であった。難易度は標準的である。

問1 日本の雇用環境とその変化についての理解を問う平易な設問である。

問2 労働組合の活動や運営についての理解を問う平易な設問である。

問3 国家財政における歳出と歳入との関係の理解をもとにした思考力を問う，やや難易度の高い設問である。

問4 不良債権処理について，銀行のバランスシートの資料を活用しながら，思考力・判断力・表現力等を問う応用的な設問である。

問5 国際通貨制度についての理解を問う，標準的な難易度の設問である。

問6 経済のグローバル化の中で進む国際分業について，資料を活用しながら思考力・判断力・表現力等を問う標準的な難易度の設問である。

第7問 発展途上国への開発協力のあり方

発展途上国への開発協力のあり方をテーマにした政治分野と経済分野の融合問題である。探究的な学習を進める形式をとっており，メッセージ性のある問題であった。難易度はやや平易である。

問1 民主主義の基本的な理解を問う平易な設問である。

問2 アジア諸国の経済状況の特徴について，資料を活用する力を問う標準的な難易度の設問である。

問3 時事的なマイクロファイナンスについての理解を問う標準的な難易度の設問である。

問4 日本の国際貢献の在り方について，立場を明確にして，それぞれの理由を思考・判断させる探究的な設問である。

以上の内容から，問題の内容は適切で，学習指導要領の定める範囲で出題されており，出題内容に大きな偏りはなかったと考える。

3 分量・程度

試験問題の分量は，大問7，総設問数32で，センター試験とは方針等が異なるため，単純な比較

はできないが、センター試験の最終回であった昨年度の試験と比べると大問数が1増え、総設問数が6問減った。取り扱う資料が増え問題全体の文字数も増えていることを考慮すると、適切な設問数であった。

試験全体の分量や文字数についても、センター試験と比較すると増えているが出題方針を考慮すると適切なものであったと評価できる。

「倫理」の問題の難易度は、全体として、やや易しかった。適切な難易度となるように、資料を扱う設問では、倫理的な知識を活用した上で資料を考察させるような工夫、知識を問う問題では問いたい知識を活用させる工夫や選択肢の工夫を求めたい。なお、その際、いたずらに教科書等での頻出度の低い内容を問うことで難易度を上げるのではなく、教科書等での頻出度の低い先哲の思想内容を取り扱う場合には、資料を踏まえる等の工夫を求めたい。出題内容や出題の分野のバランスは適切なものであった。

「政治・経済」の問題の難易度は、標準的な難易度の設問が多かった。知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題、さらには資料を活用する技能を問う問題の出題など、バランスのとれた出題となっていたと判断できる。一方で、一部の設問では判断基準が複数にわたる設問があり、例えば、制度や理念に対する本質的な出題をするなどの工夫を求めたい。

4 表 現・形 式

各設問の文章表現・用語については、受験者にとっておおむね適切であった。

「倫理」の問題においては、図や写真を活用した設問が2問、会話文の中で絵の解説を取り入れたものが1つあった。いずれも方針を踏まえたメッセージ性があり、工夫は感じられるものの、設問に密接に関連させられるとより良い。今後、更に図や写真等を活用し、考察させる設問の工夫を期待したい。

「政治・経済」の問題においては、問題の場面設定において、高校生が授業で学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を見出そうとする場面や、資料やデータ等を基に考察する場面などがあり、現実社会の諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な能力をと態度を育てることを目標の一つに掲げる「政治・経済」の科目の本質と照らして適切であったと考えられる。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストの初回となった本年度の問題は、全体として、各大問で学習過程を意識した場面設定がなされ、問題の作成方針に照らして適切であった。特に、資料を活用しながら、思考力・判断力・表現力等を問う設問の増加から、知識を単純に覚える授業からの脱却が高等学校等において期待される。

一方で、今後は、設問を解くために必然性のある、多様な学習場面の設定の工夫や、その授業場面を活用するような出題を工夫してほしい。また、資料等の中で問いを提示し、その問いについて、学習指導要領で求められる知識・技能を活用し、多面的・多角的に考察し、主体的に探究するような設問を期待したい。

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国公民科・社会科教育研究会

(代表者 大山 敏 会員数 約1,000人)

T E L 03-3333-7771

1 前 文

出題内容は、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に示された教科及び科目の目標及び内容におおむね則しており、基礎・基本を重視したものとなっている。いわゆる奇問や難問とされる問体は見られず、高校生が学習した知識や涵養した思考力や判断力を用い、考えて解いていく工夫が施されている標準的な問題である。基礎的基本的な知識を習得しているか、さらに習得した知識を活用して思考を深められるかを問う形になっている。問題作成には多くの困難があったものと推察される。基礎的基本的な知識とは何かを確認すること、その基礎的基本的な知識を問うに当たり単に知っているか否かを問うのではない工夫を施すこと、さらに思考力や判断力を問うこと、一定の平均点を確保すること、試験時間内にひととおり解き終わること、他教科あるいは他科目との出題内容の重複を避けること、高校生の学びの指針となるだけでなく高校生へのメッセージとなること、大学人としての叡智に裏付けられた質の高さを維持すること、そして何より大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の初回として広く社会に誇れるものであることなど、出題者の努力には敬意を表するものである。来年度さらなる良問を作成し、高校生の学びの成果に添えていただくべく、後期中等教育の現場にあって公民科を与える立場から意見と評価を申し述べたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

共通テストの趣旨に則して作成されている。大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）と比べ、より高い処理能力が求められた。センター試験の時から、「倫理」は科目の特徴ゆえに、思考力判断力を問う問題が多く、共通テストを先取りしてきた。そのため、今回、共通テストとなっても、「倫理」分野ではセンター試験を踏襲した形式が多かった。「政治・経済」分野では問題の示し方が大きく変わったものの問われている基礎的基本的な知識や思考力判断力は変わっていない。「倫理，政治・経済」を入試科目として選ぶ高校生の平均的な学力を考えれば、読解に要する文章等の情報量が増えても平均点が大きく下がることは考えにくい。知識のみで解ける問題を極力減らし、思考力や判断力、資料活用能力を試す問題が増えたのは共通テストの意図を出題者が十分汲み取ったからである。汲み取った分だけ、設定にこだわりすぎて問いとは関係の薄い部分で冗漫になり、かえって煩雑で、読み飛ばしても正答が得られる問いもある。学習指導要領は同じであり、センター試験で問われてきた学力は変わらない。

第1問 「倫理」。「恥」を主題とする会話文から源流思想を考える。問い方が煩雑になったように見られるが、内容は従来のセンター試験と大きく変わることはない。

問1 ①で教団の形成を問うこと自体は難しくないとされるが、意外と難問かもしれない。

②で荀子を天人分離説、③で天人相関説は朱子学で分かるだろう。④はスンナ派とシーア派の大別は基礎的基本的な知識。

問2 キリスト教の無差別の愛、律法の内面化および信仰義認説の理解が求められた。基礎的基本的な知識が問われた。

問3 ヘレニズムの思想について基礎的基本的な知識を問う。ストア派とエピクロス派について、快樂主義の快樂が精神的快樂をさすことや自然に従って生きよという考え方がロゴスを前提にしていることなど、細かい知識を求めてはいるものの、これまでのセンター試験でも出題されてきた内容である。④が最初に出てきたら面食らうだろうが、①でエピクロスの正文が示されているので④の懐疑派の説明は見抜けたらう。

問4 上座部仏教についての基礎的基本的な知識を問う。平易ながら資料文及びリード文を活用しなければ解答できない工夫がなされており、知識だけではなく思考力を発揮する必要がある。仏教用語が語源になっている身近な言葉が事例になっており、生徒の興味関心を高めようとする工夫が見て取れる。「慚愧に堪えない」という表現を主題とした出題で意欲的な取り組みである。

第2問 「倫理」。日本人の時間の捉え方から日本思想に迫る。日常世界の時間論を批判的に再考させる良い問題。ただし、写真を活用するなど工夫しながら結局、基礎的基本的な知識を問うものばかりとなってしまう点が惜まれる。

問1 『古事記』についての知識と資料の読解から正文を選ぶ。日本は多神教で、全ての神々は祀ると同時に祀られる存在であることが分かれば正答は容易に得られる。西洋の古代思想と日本の古代思想を並べて考えさせるという構成は評価できる。

問2 鎌倉仏教から末法と浄土信仰について基礎的基本的な知識を問う。絵やノートから考える設定になっているが知識の問いである。

問3 近世の思想から林羅山と荻生徂徠について確認する。高校生が作成したレポートを読んで考えるように見えて、「存心持敬」から林羅山と分かり、上下定分の理の説明として②が選べるという知識の問い。

問4 近現代の思想から丸山真男、小林秀雄、吉本隆明の特徴を確認する基礎的基本的な知識の問い。1920年に東京教育博物館（現在の国立科学博物館）で開かれた『『時』展覧会』の出品の作品で、「時の記念日」100周年記念展覧会を科博で開いたときにも掲出されたものが資料として示されている。

第3問 「倫理」。西洋近現代の思想について基礎的基本的な知識を中心に問う。キーワードは「良心」である。リード文は戦場で兵士が直面する問題から西洋近代を考えさせる良い主題である。

問1 デカルトの「高邁の精神」についての基礎的基本的な知識を確認する。文脈をおさえておけば正答は容易。単なる暗記に頼っていると④を選ぶようになっている。選択肢は、モラリストの思想やデカルトの本問とは異なった領域の話しを示している。

問2 ルソー『エミール』の一節から良心を具体的事例に置き換えたものを選ぶ思考力判断力の問い。平易ながらルソーの「良心」が今日的課題であることを高校生に確認させる良問である。

問3 キルケゴールの実存の三段階について基礎的基本的な知識と思考力を問う。美的実存、倫理的実存、宗教的実存という三段階とア～ウの説明とを結び付ければよい。とりわけ単独者が第三段階と分かることから選択肢は②か⑤に絞られる。

問4 会話文の読解に基づき「良心」の本来の意味を考える思考力判断力の問い。精読して時間を浪費した高校生も少なくないだろう。正答を得るには文章全体の読解が必要とするような出題の工夫は必要ではあるが、「良心」について語源から考えさせるという試みもよく、第3問のまとめとしての問いの役割を果たしている。

第4問 「倫理」。「歴史」の多様性について語る会話文の話の筋を理解した上で現代の思想について問う。歴史を主題として、事実性を優先すべきか、解釈の多様性を認めるかという議論を

読み解くことは高校生には大切なことだ。

問1 青年心理についての基礎的基本的な知識を問う。フロイトの心の三層構造について問う。構造的かつ根本的な理解を求めつつ、事例に落とし込めるかを問う工夫があり、評価できる。

問2 会話文の読解を問う。リード文で触れられている歴史観を念頭に、自然の生存権について考えさせる。読解力のみで答えられる平易な問題だが、自然の生存権について考えさせるという点において、現代的であり画期的な出題と評価できる。せつかく示した図が活用しきれていないことが惜まれる。

問3 ベンヤミンとマルクスの思想について問う基礎的基本的な知識の問い。文脈を捉えさせる工夫がみられる。ヘーゲルやマルクスの目的論的歴史観を否定的に見ている。(1)会話文中から誤った箇所を抜き出す問い。形式自体は新しいものの、内容はマルクスの上部構造と下部構造の区別を問う易問である。(2)ベンヤミンの思想について、レポートの穴抜きになっている3か所を文章で埋める問い。選択肢として与えられている文章の大意を捉えれば平易。読解力だけで解けると言えなくもないが、問題文として引用されているベンヤミンの著作についての確に理解する必要がある。ベンヤミンの著作とリード文を両方とも読ませることを求める点において第4問のまとめの問いとして評価できる。

第5問 「政治・経済」。「民主主義の基本原則と日本国憲法」について大学のオープンキャンパスに参加した4人の生徒が体験した内容という想定の下に、公法と私法、契約と法、教育と法、裁判員裁判、具体的な政策、政治体制、内閣、日米英の議会を主題として、基礎的基本的な知識から思考力判断力までを幅広く問う。問いの難易度以上に処理する情報量の多さに高校生は疲弊しただろう。

問1 資料1から三菱樹脂訴訟における間接適用説と直接適用説と判断できる。その上で資料2を読めば、正答④は容易である。

問2 契約に関連する基礎的基本的な知識を問う。成人年齢引き下げを視野に入れた教育的配慮のある出題である。④貸金業法は改正されて年収の3分の1以下との規制が設けられたとの記述から誤文だが、「政治・経済」の授業でここまで扱うことは少ない。

問3 教育と法に関する3つの資料文の読解に基づく思考力と判断力を問う。憲法第26条の「教育を受ける権利」に関する最高裁判例について、「義務教育無償」の判例は教科書に掲載はなく授業で扱うことは少ない。永井、奥平、芦部の各先生の名前が明示されており、社会科学を志す高校生の日ごろの勉強に当たり参考になるとともに、よき読書案内となろう。

問4 現代日本の政治や政策についての問い。候補者男女均等法が努力目標か罰則規定を含むかが問われた。本問の趣旨は、現実の日本社会がどういう方向を模索しているかを理解しているかを問うことと考えられる。男女共同参画社会の実現や障害者の雇用促進にあること、あるいは参議院議員選挙における合区や特定枠の導入による政治参加の方法について工夫していること、ふるさと納税の返礼品見直しにみられる地方自治のあり方を考えていることなどを理解しているかが問われるべきで、その結果が罰則規定か努力目標かを問うことでよいのか、疑問ではある。

問5 政治体制を包括性と自由化というふたつの指標から考える思考力判断力の問い。平易ながら工夫がみられる。

問6 日米英の議会についての基礎的基本的な知識を問う。日本の衆議院の再議決、米上院の高級官僚人事への同意権、英議会の構成と首相の下院解散権を制限する議会任期固定法いずれも平易。

第6問 「政治・経済」。今日の日本経済について、労働、財政、金融、国際経済について基礎的基

本的な知識と思考力判断力を問う。課題探究学習を念頭に置いた設定としている。

問1 日本における労使慣行とその慣行が崩れてきている現実について基礎的基本的な用語から確認する問い。平易。

問2 労働法に関し、労働組合の活動や運営について日本の法制度を問う。a 非正規雇用労働者の団結権、bとc 不当労働行為、いずれも平易。

問3 財政について歳入と歳出の年度比較から読み取れる内容を問う思考力判断力の問い。難しいが大切な問い。

問4 バランスシートの問い。バランスシートは「政治・経済」の学習内容から逸脱するが丁寧なリード文を付すことによって思考力判断力問いになっている。ただし、銀行のバランスシートを示しているものの、実際は金融と日本経済史の知識があれば①を読むとすぐ正文と見抜けてしまうだけに拍子抜けする。

問5 国際通貨制度についての基礎的基本的な知識を問う。平易。

問6 経済のグローバル化が日本と発展途上国・新興国の経済に及ぼす影響を1980年代以後の展開を示す図から考えて解く思考力判断力の問い。

第7問 「政治・経済」。日本による発展途上国への開発協力のあり方から選挙監視団の派遣、日本のODAの特徴、人間の安全保障、発展途上国の経済指標、支援についての調査資料、マイクロファイナンス、他国を援助する理由が問われた。探究学習の流れに即している。

問1 選挙について基礎的基本的な知識を問う。民主主義の本質を考えさせる問い。形式は目新しいが内容は手堅い。

問2 インド、インドネシア、タイ、バングラデシュ、フィリピンという日本の累積援助額上位国の様子について考えて解かせようとしている。しかし、日本からの援助が奏功して減少するのは栄養不良の人口割合しかないだろうからイとわかることで②が容易に選べてしまい、思考力判断力を問うことになっていない。

問3 マイクロファイナンスについての基礎的基本的な知識を問う。資料が示されているが問いの見せ方が新しいだけで資料読解を前提とする思考力や判断力を問うわけではない。

問4 日本が開発協力を力を入れる意義について考えて解く。選択肢を良く読めば正答は容易。出題の意図からすれば **30** と **31** の双方が正しく選べて得点として良いのではないか。

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 「倫理」「政治・経済」を総合した出題範囲から、両科目の問題作成の方針を踏まえて問題作成を行う。
(倫理)
- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。
(政治・経済)
- 現代における政治、経済、国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視する。現代における政治、経済、国際関係等の客観的な理解を基礎として、文章や資料を的確に読み解きながら、政治や経済の基本的な概念や理論等を活用して考察する力を求める。問題の作成に当たっては、各種統計など、多様な資料を用いて、様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本問は「恥」という身近な感情をテーマにし、日常生活の中に倫理的問題を発見しうること、源流思想を手掛かりに課題探究できること、日常の対話が深い学習に通じうることを伝えようとした。その狙いの中で、中間Iのミニリード文では、会話形式を採用し、高校生が日常生活の中で疑問を持つ様を描いた。作問に当たっては、古代ギリシア、中国、キリスト教、イスラーム教、インドの思想についての基本的な知識・理解を満遍なく問うよう配慮した。また、恥の概念を相対化・分析する資料を取り上げ、「罪の文化」と「恥の文化」といった、「恥」に関する既成の枠組みにとらわれない形での出題を心掛けた。

各小問について。問1は共同体と社会の形成に関する基礎的知識を問う分野融合問題だが、意外と難問であるとの評価を得た。問2は、恥という概念を信仰の問題と関係させるキリスト教の重要思想を取り上げた。問3はヘレニズムの思想家の理想を問う基礎的問題だが、やや難易度が高いとの評価であった。問4は「慚愧に堪えない」という表現が仏教思想に由来することを理解した上で、日常生活における恥の感情を、先哲の資料を解釈・活用しながら、分析する力を問うたもの。これは従来にない試みであり、意欲的な問題であるとの評価を得た。

第2問 日本における時間意識をテーマとして、絵画や写真資料を用いた具体的な学習場面やレポート作成の場面を通じて、各時代における社会の捉え方や人間観などの理解を深め、現代を生きる我々の時間意識にも結び付けて考えさせることを目指した。この試みは、日常世界の時間論を批判的に再考させる良問として評価された。

各設問は上述の学習場面と関連した出題となるように配慮し、またバランス良く出題することを心掛けた。得点率は全体的にやや高く、問1は正答率が高く、問4は正答率が低かった。問4は、近現代の思想家3人の主張の理解を問う基本的設問であったが、考え方に踏み込んで学ぶ機会が余りない受験者にとっては難しいとの指摘を受けた。今後の作題に当たって留意するとともに、受験者にも、思想家を単にキーワードのみで暗記するのではない学習を期待した

い。他方、正答率が高い問題が多くなった面もあるが、この点については、より適切な難易度で受験者の能力を問うことを今後の課題としたい。

資質・能力を問うという観点からは、『古事記』と『神統記』との比較を通じて、前者に見られる古代の日本の宗教観や自然観を問う問1は、「先哲の思想などを手掛かりとして、倫理的諸課題の特色、背景などの相互の関連性について考察する」力を問うたものである。この問いは、日本思想と源流思想の融合を試みた意欲的な設問との評価を受けた。また絵画資料を用いて学習する場面を設定し、末法思想に関する理解を問う問2は、「諸資料を活用し、必要な情報を読み取り、倫理的諸課題をとらえる」力を問うた。この問いは、絵画資料をもとにノートに書かれた記述や知識を活用して考えさせる良問との評価を得ている。学習者がレポートを完成させる学習場面を設定し、林羅山とその思想を問う問3では、レポートを空欄にし、さらにはレポート全体の内容理解を通して「倫理的な見方や考え方を働かせて、倫理的諸課題について、論理的に思考する」力を問うことを試みた。難易度も適切であり、総合的な理解を問う設問との評価も受けており、出題の狙いと教育効果双方において適切な設問であったと思われる。

第3問 リード文は、近代初頭から現代に至るまでの西洋思想における「良心」をめぐる思索を辿りつつ、思想史における根本的な問題が私たちの日常生活と密接に関わっており、かつ、その問題が今日の社会に生きる各人の自覚と他者への思いやりを求めるものであると気付くための契機となることを狙いとする。纏^{まと}まったメッセージをより良く伝えるための形式としてリード文を採用したが、以下に述べる本問に特徴的な設問がおおむね高正答率であったことから、この狙いはおおむね達成されたと判断できる。また設問に関しては、教科書で学習する知識に準拠する種類の設問と、資料を読解する力、読み解いた事柄を日常の場面に引き寄せて判断する力、人間の本質的な在り方について熟慮する力を問う種類の発展的な設問をバランス良く配置した。前者の種類の設問に関しては、各設問（問1及び3）とリード文との繋がりを保ち、それぞれに特定の意図を込めることで単なる暗記問題に終わらせないよう配慮したが、各意図が高校側及び外部団体におおむね伝わっていることから、適切な設問であったと考えられる。

後者の種類の設問に関しては、思想家（ルソー）のテキストを日常の場面に引き移すことを求める問2は、高校側と外部団体双方から高く評価されており、今後に生かす形式であることが確認できた。ただし、難易度が下がりすぎないための工夫を凝らす余地はあるだろう。リード文の理解を問う問4も、「良心」の構造分析をすることでリード文を膨らませつつその内容を問うという形式は本問全体のまとめとして適切との評価を得た。その上で、より深く思考力・判断力・表現力等を問う形式の工夫を試みるなどの措置によってより良い問題を作る努力は、今後も怠らないようにしたい。

第4問 冒頭の会話文並びに問3を中心とする大問全体を通して、「歴史をどのように書くことができるのか、どのように書くべきなのか」という論点をめぐって、事実性を重視する立場と自由な書き換えを重視する立場の対立を示しながら、歴史記述をめぐる倫理的な諸問題を、日常生活や具体的な教育場面の中で各人に主体的に考えさせ、さらなる学びへの展開のきっかけを与えることを狙いとした。また、歴史や記憶という主題に関連する、青年期の課題や心理学的な諸問題を問うことを通じて、各人の生活との関連を考えさせることを目指した。

各設問では、上述の主題と関連した出題になることを意識しつつ、共通テストで求められる資質・能力を問うことを目指し、現代の倫理的諸課題、青年期の課題の各分野をバランス良く出題することを心掛けた。得点率は全体的にやや高く、特に問2は正答率が高かった。

資質・能力を問うという観点からは、ストレス対処に関わる心理学理論を具体的日常生活に当てはめて考えさせる問1では「倫理的な見方や考え方を働かせて、社会生活や日常生活の中

の倫理的諸課題をとらえる」力を問うた。また実験動物慰霊碑の写真を示し、冒頭の会話文の趣旨を深く考えさせ、環境倫理の知識も問う問2では「諸資料を活用し、必要な情報を読み取り、倫理的諸課題をとらえる」力を問うた。問2は、知識の理解と論理的思考力の両方を問う工夫が見られた現代的かつ画期的な出題と評価できる、との高評価を得た。冒頭の会話文及びベンヤミンの引用文を読んで、生徒のレポートを完成させる問3(2)では、論理的思考力に加えて「倫理的諸課題を多面的・多角的に考察した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめる」力を問うた。第4問全体のまとめの問いとして評価できるとの評価を頂くとともに、「ベンヤミンは教科書でも取り扱いが少ないが、設問を解くことで、思想の学びがかなう点で良問である」との評価を得、出題の狙いと教育効果の双方で適切な設問であったと思われる。

第5問 高校生が、大学での高大連携講座に参加して法律や政治に関する複数の講座を受講し、さらに図書館や自宅で主体的に学習するという場面設定のもとで、民主主義の基本原則と日本国憲法の基礎的な知識やその概念を活用する問題である。問いは6問であった。

問1は、国家と個人あるいは私人間における憲法の適用についての最高裁判所の考え方を踏まえ、公法と私法の違いについて考察できるかを問う問題であった。問3は、学説と判例の読み取りを通して、義務教育無償について考察できるかを問う問題であった。問5は、政治体制の類型化を活用し、政治体制の特徴を比較し分類することで、制度の意義について捉えることができるかを問う問題であった。

第5問の得点率は全体として5割台前半と妥当であり、問1の正答率は低く、問2と問3は妥当であり、問4と問5はやや高く、問6はやや低かった。

第6問 生徒たちが、経済を中心とする社会状況について議論し、議論で浮かび上がった課題を考察するという場面を想定し、雇用・賃金の在り方、労働条件に関連する法制度、財政、銀行の不良債権処理問題、国際通貨制度の変遷や経済のグローバル化などの経済分野の内容について考察する問題である。問いは6問であった。

問3は、財政構造を把握するための基礎的な概念について、具体的な歳出・歳入の数値例から財政状況を読み取れるかを問う問題であった。問4は、金融に関する基礎的な概念を活用し、資料を用いて、不良債権処理の本質や影響について考察できるかを問う問題であった。問6は、経済のグローバル化の中で、日本企業の発展途上国・新興国への進出が日本経済・日本企業と途上国・新興国にどのような影響を及ぼすかについての理解を問う問題であった。

第6問の得点率は全体として妥当であり、問1の正答率は高く、問2のそれは妥当であり、問3と問4はやや低く、問5と問6の正答率は妥当であった。

第7問 生徒たちが、日本の国際貢献について探究し、その成果を発表する場面を想定し、国際開発援助についての基礎的な知識や、日本の国際貢献の在り方について考察するような作問を行った。特に、「日本による国際協力」を題材として、「政治・経済」で学習した知識を活用し、図表等の読み取りに関する技術を応用し、特定の課題について探究する知的能力を総合的に評価することを目指した。問いは4問であった。

問2は、日本の国際援助の上位国について、与えられた資料から、電力発電量、栄養不良の人口割合、平均寿命の関連性を問う問題であった。問4は、日本の開発協力に関する知識を活用し、国際協力の課題を多面的に考察し、理由や根拠に基づいてまとめ、論理的に自らの考え方を示すことができるかを問う問題であった。

第7問の得点率は全体として高く、問1と問2と問4の正答率は高く、問3のそれは妥当であった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

「倫理」分野については、関係教育研究団体から以下のような肯定的な意見を頂いた。「出題内容は、学習指導要領に示された教科及び科目の目標及び内容におおむね則しており、基礎・基本を重視したものとなっている。いわゆる奇問や難問とされる問題は見られず、高校生が学習した知識や^{かんよう}涵養した思考力や判断力を用い、考えて解いていく工夫が施されている標準的な問題である。基礎的基本的な知識を習得しているか、さらに習得した知識を活用して思考を深められるかを問う形になっている。」

「政治・経済」分野に関する反響・意見とそれについての見解は次のとおりである。

まず、「高等学校学習指導要領」については、その範囲に沿った出題がなされたとの評価を受けた。

次に、共通テストの目的に込めているかであるが、(1)については、センター試験との比較において設問数、試験全体の分量や文字数の面で適切であったとの評価を受けたことから、これまでの蓄積は生かされたと判断している。(2)については、資料を活用しながら、思考力・判断力・表現力等を問う設問が増加したことから、知識を単純に覚える授業からの脱却が期待されるとして、高校の授業に対し良い影響を与えたとの評価を得た。(3)については、問題の場面設定において、高校生が授業で学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を見出そうとする場面や、資料やデータ等を基に考察する場面などがあり、「政治・経済」の科目の本質と照らして適切であったと考えられるとの評価を受けた。このように、共通テストに対する要請にはおおむね応えられたものと判断している。

ただその一方で、

- ・設問を解くために必然性のある、多様な学習場面の設定の工夫や、その授業場面を活用するような出題を工夫してほしい。
- ・資料等の中で問いを提示し、その問いについて、学習指導要領で求められる知識・技能を活用し、多面的・多角的に考察し、主体的に探究するような設問を期待したい。

などの意見・要望・提案等を頂いた。

また、個別の問題に対しては、以下の通りの意見を受けた。

第5問 民主主義の基本原則と日本国憲法をテーマにした政治分野の問題である。法律や政治に関する講義に参加するという形式のため、スムーズに設問に取り組むことができる形式であった。難易度は標準的であるとの評価を頂いた。

問1は、諸資料から公法と私法と自治の在り方との関係についての理解を問う、やや難易度の高い設問であるとの評価を頂いた。設問の際の表現、思考過程の工夫などに取り組んでいきたい。問3は、義務教育の無償について、様々な学説や判例などの諸資料から読み解く、標準的な難易度の設問であるとの評価を頂いた。問5は、政治の自由化と包括性の概念について資料を活用しながら思考力・判断力・表現力等が求められる応用的な設問であるとの評価を頂いた。今後も同様の作問を行っていきたい。

第6問 現代の経済をテーマに、雇用や賃金を国家や財政の状況、銀行制度、国際経済の変化の関係から捉える出題であった。難易度は標準であるとの評価を頂いた。

問3は、国家財政における歳出と歳入の関係の理解をもとにした思考力を問う、やや難易度の高い設問であるとの評価を頂いた。表現を簡易化するなどして質の向上に努めたい。問4は、不良債権処理について、銀行のバランスシートの資料を活用しながら、思考力・判断力・表現力等を問う応用的な設問であるとの評価を頂いた。今後も同様の作題に努めていきたい。問6は、経済のグローバル化の中で進む国際分業について、資料を活用しながら、思考力・判断力等を

問う，標準的な難易度の設問であるとの評価を頂いた。

第7問 発展途上国への開発協力の在り方をテーマにした政治分野と経済分野の融合問題である。主体的・対話的で深い学びを実現するための，探究的な学習を進める形式をとっており，高等学校の教育現場に対するメッセージ性のある形式であった。難易度はやや平易であるとの評価を頂いた。

問2は，アジア諸国の経済状況の特徴について，資料を活用する力を問う，標準的な難易度の設問であるとの評価を頂いた。問4は，日本の国際貢献の在り方について，立場を明確にして，それぞれの理由を思考・判断等させる探究的な設問であるとの評価を頂いた。今度も同様の作題に努めていきたい。

4 ま と め

「倫理」分野についてのまとめは以下のとおりである。

今回が初めての共通テストであり，問題作成部会は作題に当たり困難に直面した（そこにはコロナ禍の下での作題も含まれる）。そのような状況下で努力して作った「倫理」の問題に対して頂いた肯定的評価は，今後の作題に向けて大きな力となるものである。しかしそれは同時に，その長所を更に伸ばしていくべき課題でもある。基本的な知識の確認，思考力・判断力・表現力等を問うこと，高校生の学びの指針となるだけでなく高校生へのメッセージとなること，大学人としての叡智に裏付けられた質の高さを維持すること等の課題達成に更に取り組んでいきたい。またその際，問題作成方針に沿いつつ，受験者に，教科書で学習した基本的な知識を踏まえ，多様な資料を活用して考察させる質の高い問題を作っていきたい。具体的には，

- ・これまで同様，分野別・時代別等においてバランスが取れており，一定の平均点を確保し，試験時間内にひとつおき解き終わる問題作成に努める，
- ・基本的知識を基にしながらも，変化する社会に対応できる理解力，思考力・判断力・表現力等を問う問題作成に努める，
- ・高校生の学びの指針となるだけでなく高校生へのメッセージとなり，また大学人としての叡智に裏付けられた質の高さを維持するものとして，広く社会に誇れる問題作成に努める，ということになる。

「政治・経済」分野についてのまとめは以下のとおりである。

「高等学校教科担当教員の意見・評価」や「教育研究団体の意見・評価」で述べられているとおり，全体としては，共通テストに求められる水準の作問ができたと評価している。だが，更に良質な問題を作成するには，

- ・リード文に代わる導入部分について，高校の学習の在り方に対するメッセージ性を高めるとともに，問題との関連性を強めること
- ・解答のための必要性や場面設定としての適切性なども考慮しつつ，全体の文章量を適切な範囲に収めること
- ・知識を問う問題については，問われている知識を受験者が把握しやすいように工夫することなどが求められている。

こうした要請に応えることは容易ではないが，センター試験時代からの蓄積を踏まえ，今後も良質の問題が作成できるよう，問題作成部会の総力をあげて取り組んでいきたい。